

妙安寺だより 328

テレフォン法話 092-751-6084 (毎週月曜日に話が変わります)

〔 〕

生きとし生けるものは、「六道」と呼ばれる世界をすると考えられおり、どこに転生するかは生前の行ないによって決まり、その繰り返しからすると(仏の世界)に行くことができる。

「」は、殺生などもっとも罪深い者が行く世界。「」は、欲深くな者やが過ぎた者たちが行く世界で、生前の罪によって、食べられるものが限定されて、口が針の穴ほどしかなく、食べたり飲んだりすることができません。

「」は、かで知らずな者が行く世界で、鳥や獣、は虫類として生まれ、環境に左右されながら不安定で苦しみの多い生活をします。「」は、の暮らす世界で、阿修羅として生まれると、常に挑んでい続けなければならない運命にあり、しかも勝つことはなく生傷が絶えない世界。「」は、人間の世界は三つの要素で成り立っています。「」(死体となれば腐っていくこと)、「苦」(生老病死、別れなどあらゆる苦しみ)、「無常」(必ず死は訪れること)

「」は、天人となって、甘露を味わい、楽しい日々を暮らし、寿命は大変長い、臨終の時には「」という衰えが表れ、そのつらさは地獄の苦しみの16倍に感じるという。

六道銭・六文銭のいわれ

の中に貨幣を入れる習慣は日本だけでなく、西洋や中国にも古くからありました。日本では「」
「」といい、俗に“のを渡る船賃”とされています。金額が六文になったのは、の巡る六道に一文ずつ置いていくためといわれています。

喪服の色は白だった

江戸時代までは、の色は白でした。は亡くなった人の服装である。
家族に亡くなった人と同じ服装をさせることで、死者とともにあの世に一步踏み込んだ状態にして置き、死者が孤独になって他人を死のれに引き込まないようにするという意味がありました。

(週刊「江戸」より)

